

『アマチュア無線から放送の理念を問いかける』

川崎隆章 (JK1HCM)

1) 放送の起源はアマチュア無線

日本ではピッツバーグの KDKA 放送局が世界最初の放送局だ、と定説のようにいわれているが、これはあくまで『商業放送局』の免許による第一号で、常設ラジオ局の世界第一号はカリフォルニアの『サンノゼ・コーリング (San Jose Calling)』局である。

『サンノゼ・コーリング』は、もともと施設実験局（今で言うアマチュア局）を運営していた Charles Herrold が、発明されたばかりの無線電話で『市民の情報共有』に役立てようと開始した簡素な定時放送であった。

この事実は、放送の根源は何かという問いに対する答えを示している。つまり、技術実験に興味を示すことが普通であった施設無線局（アマチュア無線家）の中から、単方向通信の『目的』に注目した無線化があらわれたということである、つまり『ラジオ放送は、目覚めたアマチュア無線家が社会のために産み出したもの』だといえる。

Charles Herrold を『目的』に目覚めさせたのは 1906 年のサンフランシスコ地震であった。震災後、必要な情報共有がなかったために、誤解と恐怖と混乱がうまれ、地震後さまざまな悲惨を見た Herrold が、誕生したばかりの『無線電話』を使って『問題解決』しようとしたのだ。

日本の放送の始まりも、数人のアマチュア（施設無線局の個人運用者）のアプローチから始まった。ここでは無線電話の研究において「目的と社会的影響力」にも注目した黎明期の代表的無線研究者を三人挙げたい。

浜地常吉

（海外資料をもとに無線電話機を組立て、無線電話実験局「東京一番・二番」を開局）

本堂平四郎

（無線電話実験をいち早く取り組み、受信機メーカーを設立）※一関出身

草間貫吉

（アマチュア無線の立場を確立し、のちに朝日放送で放送技術の向上に貢献）

以上 3 人は、それぞれ無線技術の研究を突き進めながら、それぞれ「目的」に添った技術の特化をすすめた。濱地氏、本堂氏や、その後放送の世界で活躍した草間氏に代表される活動は、Charles Herrold 同様「目覚めたアマチュア」の活動に比肩するものといえる。つまり、アメリカでも、日本でも、放送の黎明期は、目覚めたアマチュア無線、すなわち『スーパー無線家』たちの、**卓抜した技術力と、自由な発想、切実な想い、そして、自由な目的で運用できるある程度身銭によって切り開かれたのである。**

これはそのまま社団法人東京放送局（JOAK）初代総裁であり、ここ水沢が輩出した偉人である後藤新平の想いや訴求に直結した。それは関東大震災の復興という目的によって最大限に力づけられた。放送の歴史の中には、黎明期のアマチュア無線家が抱いていた発想や想いが深くしみこんでいるのだ。

JOAK設立にあたって事業申請を受け付けた中に『大東京アマチア無線クラブ』の申請があったことは注目に値する。申請一本化で免許がまとめられていったのであれば、現在のNHKには微量ながらアマチュア無線家の血が入っていることになる。

放送は、アマチュア無線家から生み出したものである。そして、放送とアマチュア無線は兄弟のように育ったということである。

2) プライドと命

アマチュア無線家に、放送現場に伝わるさまざまな「伝説」をお話すると、面白いだけでなく、大きな共感を得ることが多い。それは、アマチュアも放送人も「電波を守り」「運用を継続する」ことにプライドと使命を持っているからかもしれない。

たとえば、歴史ある高校野球の初中継は、まだ中継設備が装備される以前であったため、なんと放送用の予備中波送信機を甲子園球場に持ち込んで、臨時に『甲子園放送局』を立ち上げ、それをJOBK（大阪放送局）から『放送波中継』した。手持ちの装備のやりくりで新しいことを実現させてゆく最も初期の例の一つである。

私が研究する西日本初の民間テレビ局「大阪テレビ放送」（JOBX-TV 1956年開局、1959年朝日放送と合併）では、平均年齢25.5歳の若い集団が、理論的に考えて『解決不能』と考えられていたような問題にも『やってみなわからんやろ！』と言う合言葉で積極的に取り組み、どんどん実現していった。その結果、大量の特許と日本記録、世界記録を残し、いくつもの賞と人気番組を残し、そして大阪の飛躍的な戦後復興に大貢献を果たした。

（この詳細は、近日刊行される拙著「まぼろしの大阪テレビ」をお読み頂きたい）

新潟放送は、ラジオ新潟時代に市内の大半を焼き尽くした深夜の大火に遭遇した。局舎に火が迫る中、アナウンサーが風に吹き飛ばされないようマイクコードで屋上の金網に縛り付けて火災を実況中継した。しかし、放送開始の時点で既に市内中心部は火の手に覆われており、マイクを握り締め、眉を熱風に焼かれながらの実況中継であった。

やがて、局のある大和屋デパートの近くから火の手があがり始めたのを機に「小林デパートから火が出ました。これ以上は危険ですから、放送を続けることができません。この辺で放送を打ち切ります」という言葉を最後に放送を中断。スタッフはすぐに全員退避した。その15分後には大和屋デパートに火がうつりし、ラジオ新潟は全焼した。

一方、別のスタッフは市内から離れた送信所に集結し、放送中断の1分後、落ち着いた声で『それでは、送信所から放送を続けます』と火災の状況や避難指示などが引き続き伝えはじめ、市民に対する責任を果たしたのである。

また、新潟放送は 1964 年新潟地震で、大火の教訓からヘリコプターからの空中実況を展開。まだ警察・消防ともヘリコプターを使用していなかった時代に、アナウンサーが空から実況中継し、市民への避難誘導や、警察・消防への出動要請をおこない、市内の被災状況の共有にも貢献した。

1958 年の西日本豪雨では NHK 熊本放送局が洪水で孤立。多くのスタッフが取材で外出した中、局内に残された鈴木健二アナウンサーが、四日間にわたって、電話回線も途絶したなか、一人で実況放送を続けた。この逸話は NHK 全体でも伝説として語り継がれている。

東日本大震災で東北や北関東の放送局がどれだけ放送の維持と電波の継続に命をかけたかは、会場の皆さんのほうがよくおわかりになるだろう。もちろん放送の現場においてもコンプライアンスが導入され、スタッフの安全が第一に守られるようにはなったが、それでも災害時の放送現場は「想定外」の連続であり、頭と身体をフル稼働させて「放送を守る（＝市民を守る）」ため奮闘するのだ。もちろん、放送局のスタッフは、日々、ルーチン作業に従事していても、百年に一度の『いざという時』の事を頭においている。

このような話はアマチュア無線化の心にも、共感する何かをもって響いてくる。

日本の放送が発達成長した根底には、命令より興味、複製より冒険、損得より解決、斬新さより問題発見、報酬より奉仕、理論より方法を優先させるという「体当たりアマチュアリズム」があるが、これは、無線世界全体がアマチュア無線に託している『進歩的未来』と通底していると考えられる。それならば、放送とアマチュア無線は同じ理念を持った者同士で手を組めるのではないか。

3) 「放送」とは何か

ところで「放送」とは何だろうか。

「同報通信」は、何をもって「放送らしさ」を帯びてきたのか。

技術的なことをいえば「同報通信の一形式」である。

法的なことをいえば 20 世紀初頭に不特定多数を対象とした同報通信を、世界各地で Broadcasting（放送）と名付けたのが始まりである。

しかし、実際に、あらゆる同報通信の中で放送を「放送らしく」しているのは、放送が誕生以来守り続けている 3 つの不文律（オキテ）にあるといえる。アマチュア無線から放送が別れた時、無線家が一番気をつけた事であり、未だに『無言のオキテ』として受け継がれているものだ。

- 一、予告した（約束された）開始時間を必ず守ること
- 二、予告した（約束された）チャンネルで発信すること
- 三、予告した（約束された）内容を必ず伝えること

サンノゼコーリングの Charls Herrold は、サンフランシスコ大震災で目覚めたアマチュア無線家ではあるが、やったことはシンプルで、要は、この三つの掟を具体化したに過ぎ

ない。そして、放送はこの『3つの掟』を誠実に守ることによって発展してきた。歴史上わざとこれを破る実験も行われたが、一つとして定着したものはなく、利用者に評価された事もない。

現在のアマチュア無線家も、放送の掟を利用して、放送のような存在感を打ち出すことができるのではないか。アマチュア無線は技術的な実験や開発を重視する傾向が強いが、そろそろ『伝え方=運用形式』の問題を強化すべきだろう。

4) スーパー・ハムの育成

たとえば、アマチュア無線家のなかに、アナウンサーのような説明力、実況力、発音技術を持った喋り手はいるだろうか。また、ジャーナリストのような観察力、描写力、真偽判断力、編集力を持った人はいるだろうか。

また、放送の「三つのオキテ」のように「決まった時間、決まったチャンネルで、決まった局が」でてくれば、人々はその存在を自然に重視しはじめるのではないか。

いままで、通信環境と通信技術の向上がアマチュア無線の主たる目標であったが、これからは（モールス信号でキーイングの正確さ、美しさを訓練するように）通信の「質的向上」をめざし、物事を「正確にとらえて、わかりやすく伝える」訓練をすべきなのではないだろうか。それにより、アマチュア無線家が一般社会において、より役立つ損座になることもできるのである（もちろんそれがすべての無線化に求めたいのではない。技術的興味に特化したあり方も尊重されなければいけない）。

岩手のアマチュア無線家は、東日本大震災をはじめ、さまざまな災害現場に協力しながら、災害現場では「錯綜する情報を捌くのが一番大変だ」と言うことをよく知っている。また地元の危機に際して、考えていた通りに使命を果たせなかったことを悔やんでいる人が少なくない。

これらの人達の無念をいかに捌き取るべきだろうか。たとえば、アマチュア無線家が、報道に「三つのプロセス」がある事を知るだけでも、自分たちにどんな貢献ができるのか、具体的にイメージしやすくなるのではないか。

報道は、簡単に言えば『事実を集めて、真実をあぶり出す行為』と言え、次の3つのプロセスに分けられる。

- 1 Report (報告)
- 2 Comment (解説)
- 3 Analysis (分析)

第一段階は『報告 (REPORT)』。

まず、報道では目の当たりにした事実を、正確な観察や聞き取りによって、いかに素早

く的確に切り取るかが大事である。

報告者は言葉や映像の断片だけで伝えるため、観察力や描写力、説明力が高いほど良い。そして、機動力を伴って、できるだけ沢山の方面から沢山の情報を『足で稼ぎ』、生身の『目と耳で』集めることが肝心なのである。報告は一次情報であることが最大の価値である。

第二段階は『**解説 (COMMENT)**』。

取材現場では、一回の報告では物事を断片でしか伝えられないから、集められた『断片的事実』を、専門知識やレファレンスデータで解説して補わなければ、わかりやすく第三者に伝えることができない。そのため、たとえば地理的情報や人文的な背景情報で報告を補い、複数の報告を付き合わせて大きな事実を発見・表現し、事態の全体像をまとめてゆくことがこのプロセスである。

第三段階は『**分析 (analysis)**』。

解説によって組み上げられた事実の全体像を分析して、その奥にある『真実』を導き出し、人々が教訓を得るための材料を提供する、または教訓を示す。それは、地政学的背景や政治的背景をさぐることであり、事態を導き出した原因や根本となる原因を特定し、問題解決への道筋を見せたり提言してゆく論説活動である。

以上三つのうち、分析は報道機関の存立する『立場』に依存するものであり、また、アマチュア無線家がこうした分析を無線電波を通して不特定多数に主張することが、電波法におけるアマチュア無線の目的内にあるとは考えにくい。

しかし報告についてはアマチュアが日常的な交信においても必要とされるスキルであり、取材・報告の技術を学ぶことによって『交信内容の質的向上』を図ることができる。そうならば、非常の時も今まで以上の力を発揮できるだろう。また、解説については、アマチュア無線家は少なくとも『無線技術』と『地元の地理的事情』については解説できるだけの情報とレファレンスを持っているから多少の補足は可能である。仮にハブの役割をする局が複数の報告をつきあわせて集約化してゆくノウハウを身に付ければ、すくなくとも生活圏の範囲において「機動力、取材力、編集力」を備えた「スーパー・ハム」(またはスーパー・ハム集団) があらわれることになる。

およそ一世紀前に分かれたアマチュア無線・放送という「兄弟」は、独自の進化のなかで、かたや『いかに困難で限られた環境から確実に電波を飛ばすか』を追究し、かたや『どんな困難な環境にいる人にもわかりやすく伝えるか』を追究・確立してきたのだ。兄弟がてをとりあって、互いの成果を活用しあうことを考えてもいいのではないか？

もちろん、今のアマチュア無線家の世代でこれをすぐに目指すのは難しいかもしれない。しかし、次の世代に、無線技術と運用技術の両方のエキスパートを育成することは必要ではないか。現在、日本においては、アマチュア無線家の高齢化が問題となっており、JAR 1においても会員の高齢化や、若手無線家の『枯渇』は深刻である。

先日の熊本・大分における地震は、東日本大震災のような一撃壊滅型ではなかったが、度重なる地震と錯綜する情報によって、長期にわたる精神的負担が大きな問題となっている。

る。特に情報の錯綜については、現地を実検した仲間の報告によれば、指定されていた避難所にたいする準備はあったものの、それ以外の、臨時の判断で解放された施設の避難所や、たまたま人が集まってできてしまった小さな避難所など、行政の把握できる範囲を超えた避難所ができ、それらに横の連絡がないため、融通協力することも出来なかった。

一方、インターネット、特にSNSの発達でさまざまな救援要請や支援情報がやりとりされたが、結局、発信手段のない避難所は置き去りにされ、逆に『声の大きな避難所』に物資が集中するような現象が起き、支援の格差が却って開いてしまった感がある。

また、SNSは情報が拡散によって生き残る代わりに、古い無効な情報や、ウラの取れていない不正確な情報まで拡散され、却って現場の困難や、現地事情に対する誤解を産んでしまった感がある。

本来ならば、熊本・大分の地震のようなケースはアマチュア無線家の最も得意とするところである。クラブ局を中心とした組織的行動で情報収集と再発信が、警察や消防との連携の下で実現するはずであったと思う。

しかし、いかんせん、それをやるには現在、人数・体力ともにアマチュア無線は力不足になってしまった。機動力が一つの特徴であるアマチュア無線は、高齢化と人口の現象で確実に力を失っているのだ。

このままで、日本のアマチュア無線は存続できるのだろうか。

今こそ、若手無線家の育成が必要なのは言うまでもないが、事態が焦眉の急となった今、現役アマチュア無線家と放送局の協力で『高度な無線技術と、自由な発想の運用技術と、鍛えられた取材・表現技術』を持った、若き『スーパー・ハム』を世に送り出して、高度な技術と高い責任感を備えたアマチュア無線家を増やす核にするべきではないかと考える。

たとえば、県内から小学生から高校生まで毎年数人を募って、無線免許の取得、高度な無線技術の伝授、アナウンスや取材・編集・表現の技術伝授を『無償』で提供し、研修後も定期的な勉強会や通信訓練で交流と連携を深めて育成するような『スーパー・ハム育成プロジェクト』を今こそ立ち上げることを提案したい。

こういった『観察・表現能力が高い』『電子技術を身体的に熟知した』『年齢や地域を超えたコミュニケーション経験を持った』ギルド感覚の集団で育てられた青少年は、アマチュア無線の世界のみならず、放送の世界、そして、社会全体から求められる人材になるに違いない。アマチュア無線がそういったスーパーな人材の育成の場になることは、アマチュア無線の存在意義を示すチャンスでもあると思う。

日本アマチュア無線連盟 100周年まで 10年あるが、この間に連盟がおこなうべきは、社会の現場でリーダーシップをとれる『スーパー・ハム』の育成と、その成果により若者がアマチュア無線の世界に関心を向けるようアピールをすることではないかと考える。

5) ジャーナリスト技術を持った新しいアマチュア無線家網

ここでひとつの提案をしたい。

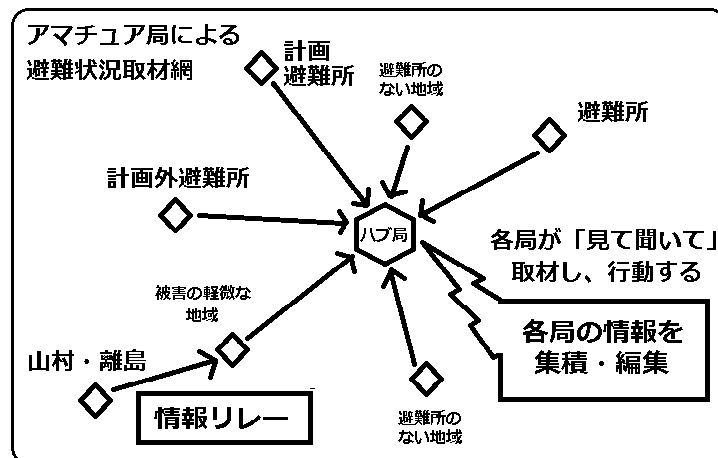
先に述べたとおり、放送には3つのオキテ（時間、チャンネル、内容）があり、報道には3つのプロセス（報告、解説、分析）があるが、これらの中にはアマチュア無線家が身に着ける価値のあるものがある。

たとえば、取材（観察・描写・判断・説明）技術や、簡潔でわかりやすい報告技術を備えたスーパー・ハムがそれぞれ近隣の地域を取材してハブ局に報告。報告を補足し、組み合わせ合わせて集約した内容を、きまったチャンネルから各局に向けて、定時に「放送」。各局は自ら全体情勢を合理的かつ正確に把握するとともに、それぞれの無線機を通じて各地の関係者や報道関係者などにもスピーカー経由で聞かせ、広く情報共有をはかるシステムである。

このシステムの最大の特徴は、まず、編集技術を持ったハブ局が情報を整理して、鮮度やプライオリティをつけて「放送」形式で全員に送り返し、共有させるという点にある。これは、普段からの訓練を要するものではあるが、地域行動の司令塔としてぜひ育成した人材である。

【1 取材・集積モード】 各局が「見て、聴いて」取材した情報をハブ局が集積・編集

- ・「大きな手が届くまで」、痛いところに手を届かせる代用ネットワーク
- ・取材者～送受信機～地域・地理に対する知識が一体化した「行動する情報網」
- ・あくまで「行政の手が回らない計画外の問題を臨時に解決・協力する」ことが目的。
- ・SNSで拡散される「遅れた情報」「不正確な情報」「憶測」から人々を守る。
- ・計画避難所の救援状況、計画外避難所の発見情報、離島や山間などの情報、交通情報等、「取材に大きな危険を伴わない情報」や「各拠点のリーダーやボランティアが共有すべき情報」を、地域事情、地理情報に精通したアマチュア無線化が積極的に集積する。

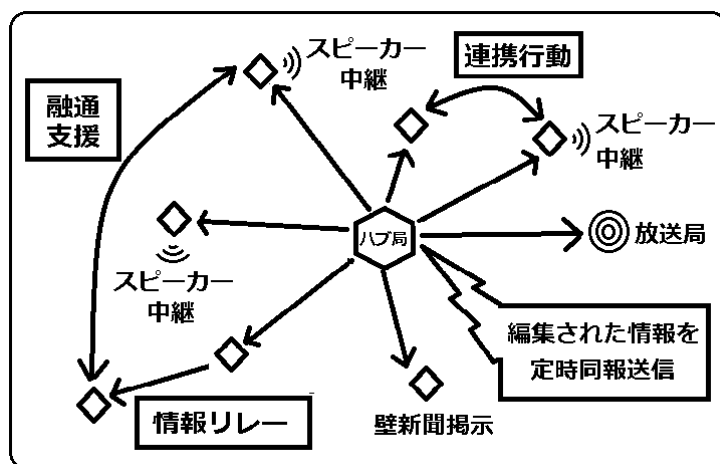


【2 放送モード】 ハブ局が「放送局」となって定時に、予告されたチャンネルで実施

また、もう一つの特徴としてスーパーハムと移動手段（車、バイク）が一体になることで、通信と強い行動力を具有しているという点がある。高度な無線技術と地形についての知識を持つことで、山奥や離島の遠隔局の中継をしたり、また、出先の避難所間の物資の融通を引き受けることもできる。

さらに、ハブ局担当者にアナウンス技術（発声・発音・原稿の扱い）を習得させることで、定時におこなわれる放送をスピーカーで避難所に拡声放送することもできるとともに、放送局に送り出すことも可能になる。何より、大幅にききやすくなるだろう。

- ・「各局」に対して、集積・編集された情報を同報。
- ・必要に応じて、スピーカー中継、壁新聞などで、避難者、救援者と「情報共有」。
- ・必要に応じて、局間の連絡で避難所間の融通や連携・協力を取り次ぐ。



これを実現するためには、たとえば、小学生～高校生に向けて助成手段を設け、以下の技術・資格取得をサポートすることが望ましい。

- ・アマチュア無線資格の取得
- ・アナウンス技術の取得
- ・情報取材、編集技術の取得

さらに、ベテラン無線家がそれぞれ獲得した現場技術や古典的な無線技術によるやりくり術（こわれた一台のラジオから無線機を作る、代用品によるアンテナづくりなど）を「現場の名人芸」として伝授したり、最終的には混乱したコミュニケーション状況に巻き込まれないための理学的知識にまで至る「総合的教養」を身に付けさせるのである。

年に数人づつを選抜して育成し、免許取得と集中育成の期間終了後も定期的な講習会や勉強会と定期交信（QSOパーティーや訓練大会）を実施して、集団の連携力も高めてゆく。こうした人材育成的な視点からの取り組みは、アマチュア無線全体による社会貢献として

も評価されるのではないだろうか。

アマチュア無線家は、放送局同様「電波法」の縛りがかかっている。「嘘をついたり、政府の転覆、反社会的な通信をしたら処罰される」という立場だが、逆にいえば「うそをつかない」ことや「反社会的な言動」をしないことが「保障」されているわけで、一つの「信用保証の手段」として電波法を利用することもできる。これは「うそとまことが一緒くたに流れる SNS」の情報信用に一石を投じるものでもある。

もし岩手県内で毎年 10 人ずつの若者を育てれば、10 年後には 100 人近いスーパーハムが常駐することになる。これらの若い機動力は、無線界のみならず、地域全体に大きな安心を与えるのではないか。このアイデアが、日本のボーイスカウトの父でもある後藤新平のふるさと水沢において提案されることに大きな意味を持たせたい。

いまこそ「サンノゼ・コーリング」の精神に注目して、放送とアマチュア無線の協力によって「人々の安心を現場で支える」情報流通システムを実現し「次世代の通信インフラを生み出すスーパー無線家」を全力で育成すべきではないかと考える。

そして、アマチュア無線界がこうした育成活動に積極的に取り組むことによって、同祖の兄弟である放送の持つ（ギルド的性格と表裏関係にある）ある種の閉鎖性や保守性に刺激を与えることを目指す。インターネットメディアに押されて自信を喪失しはじめている一部の放送人たちに向けて「理念への回帰」を呼びかけることができないかと思うのだ。

2016 年 6 月 5 日 岩手県奥州市にて

（以上の要約は、実際に喋った内容をもとに、資料や、質疑応答の内容を盛り込んで再構成したものです）